

Title	コズロフ著 初期商品生産：商品生産理論序説
Sub Title	Die Warenproduktion in ihren Anfangsstadien (Eine Einführung in die Theorie der Warenproduktion) by G. A. Koslow
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.10 (1961. 10) ,p.921(79)- 927(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19611001-0079
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611001-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

者となり、中産階級やプロレタリア農民などの活動に露骨な嫌悪の念を示していた。バークの歴史観が、そのために最も有効であったことはもちろんである。

そこで、彼がフランス革命を契機に反動に転化した場合、その根本的な原因は彼の歴史観という抽象的なものではなく、革命の衝撃を受けた支配階級及び彼の中におけるバークの位置及び態度がそれを説明するべきではないだろうか？ つまり、彼の歴史観が原因となって反動化したのではなく、革命の衝撃を受けて恐怖を感じたイギリスの支配階級が、反革命戦と激しい弾圧体制に転化しなければならなかったし、彼の歴史観いかにかわらず、バークはいちはやくこれに迎合したのではないかということも考えられる。彼はその才能にもかかわらず、台閣の一員たることをにべもなく拒否され、当時は政界でも孤立して引退を迫られていたという心理的状况に私は興味を持っているが、それはもとより試論に過ぎない。たまたそう考えると、バーク自身の思想や論理や行動のコンシステンシーを無理に求めることはあまり意味がなくなって、当時の支配階級全体の動向とバークとのコンシステンシーがむしろ問題になり、その中における彼の存在の意味や功績や眼界の評価が重要に思える。

五

このような点を明らかにするためには、彼の経済思想のさらに詳細な分析が不可欠であろう。Thoughts and Details on Scarcity,

is.を中心として、著者はバークの自由貿易論、自然調和論とありあげ、かれのいう経済的自由は営利主義的地主階級の自由であり、大地主階級の経済的寡頭支配の代弁者であったとして、再び、Cobdenの言葉をかりて、「かれの経済思想の様式は、その保守的政治本能、貴族主義、宗教的理念、ロッキの財産論、アダム・スミスやファイジオクラットの理論等の結合によって決定されている。」と要約される(一五八頁)。しかしながら、ここでは、どのような仕方で結合されたかが問われるべきで、問題は再びまさにここから出発すべきであろう。たとえば、ロッキの自然財産論は当時急進派に専用され、バークはその中に秘められた経済的平等主義の危険を素早く読みとっていたはずだし、バークにスミスの影響があったとしても、農業革命、産業革命による農民の没落、凶作、対仏戦による物価騰貴などによる一七九五年暴動の時点で楽観論を説くのは時代錯誤も甚だしく、スミスの画期的な社会の体制把握も欠いて、スミスの俗流化に過ぎない。

その他モンテスキューやヒュームの評価、経験論や功利主義の理解などについて若干の疑点を持っているが、ここでは省略するとし、最も関心を持つのは、著者がバークに対してどのような根本的な批判を抱いているかということである。この「保守党宣言」によって一般大衆に対する軽蔑が理論化された時以来、労働運動と社会主義は強大な権力によって弾圧されつつ苦難の道を歩んできた。バーク自身が反革命戦争と国内弾圧の走狗となっただけでなく、そ

の理論が反動の最有力な武器となったことはもちろんである。今日未だに、諸国において反動化した保守勢力によって大衆の権利が不当に抑圧されている時、もし研究者が大衆と共にあるならば、バーク研究は基本的にはバーク批判のはずであろう。著者は、バークの弾圧政策や事実誤認について批判を加えてはいるものの、保守主義者としての一貫性を最も名譽あるものと考えたり、「徹頭徹尾良きイギリス人」(三六一頁)として評価したり、いささか「ヒーローに心を奪われる」(D. E. Butler)の感がなくもない。

最後に、バークの保守主義の展開を分析するためには、これに對立した哲学的急進派、さらにはペイン、ゴドウィン、ロンドン通信協会などの研究が不可欠であると思うし、これだけの綿密な研究書にはもっと詳細な文献目録を期待したい。Copeland の新資料やMahony の新しい研究などに触れず、引用外国文献に邦訳がある場合にもほとんど黙殺しているのは、バーク好みの保守主義、貴族趣味であろうか。

* Cf. R. Schlafre; Private Property: The History of An Idea, 1951. 明山・浜田訳。
* * * バークとスミスの関係については、例えば C. R. Fay; The World of Adam Smith, 1960. これについてはいずれ別に紹介する。
* * * たとえば、日華事変の年に平泉派の国家主義者上田又次が書いた、「エドモンド・バーク研究」を見られたい。これはお

そらくこれまでわが国では唯一のバークに関する書物であったが、革命に対する激しい憎悪から、革命を批判しイギリスの「国是」を守護したバークを賞揚している。

(御茶の水書房・A5・三七二頁・八五〇円)

コズロフ著

『初期商品生産』

——商品生産理論序説——

G.A. Koslov; "Die Warenproduktion in ihren Anfangsstadien. (Eine Einführung in die Theorie der Warenproduktion.)" 146s. Dietz Verlag Berlin 1960.

飯田 裕 康

『資本論』の冒頭の商品の性格をめぐる論点となっているものは、マルクスが理論的抽象をそこにとどめ、そこから「後方への旅」をはじめたところの商品が、いわゆる単純商品であるのか、資本制商品であるのかという点であった。かかる抽象度の高い問題が提起されるについては、その論点は単に冒頭の商品の性格如何という点に止まらない。すなわち、冒頭の商品の諸規定は、そこにおい

て展開された価値規定のもつ意義を『資本論』体系の基底的論理として理解しようとする場合、体系の始元として最も重要な位置を占めているものとみななければならない。マルクスが『資本論』においてなしたところの経済学批判の仕事は、この冒頭の商品論(II 価値論)から始まって、論理的・歴史的な資本制生産社会の経済的諸範疇の展開であり、その場合にも商品論には経済学批判のための基礎範疇としての展開という実践的意義が与えられていた。このように冒頭の商品のもつ意義の多様性は、資本論研究の永い歴史のなかで多くの論争的テーマを形成しつつ、とりあげられてきた。そして戦後、国家独占資本主義という資本主義の最高発展段階、すなわち、社会主義への移行段階にこの問題は新たなテーマとして登場した。

さて、わが国において、『資本論』における冒頭の商品の問題は価値論研究史の中心的論点として戦前・戦後を通じて活発な論議が行われてきた。そのなかからわれわれが明らかにしうる論点は、商品生産と資本主義生産との関連如何という問題から『資本論』における論理的・歴史的方法といわれるものの意味が先ずもって問われ、それに伴って、「価値法則」論が展開されることになった。

エンゲルスは、『資本論』第三部の序文において、とくに、過去五〇〇〇年の歴史を貫いているところの価値法則の展開をたどった。それは、『資本論』第一部における価値規定に史的側面を重視するものとして論議の対象となっていたのであるが、さきの問題においては、これについても評価を異ならしめ、価値法則を資本制的

生産に固有の法則であるとする見解と、価値法則を商品生産の法則であると見解との対立へと発展した。かかる対立は価値法則の論理と歴史との二側面が各々強調されたものとして、各々の見解における方法認識と密接に結び付いているのである。しかしこと価値法則論に関する限り、それは冒頭の商品云々の問題としてよりも、むしろ、より実践的な問題提起である。それは資本主義という社会経済構成体がそのうえに成立するところの基盤の把握に関連している。スターリンが『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』(Экономические проблемы строительства в СССР)において提起した商品生産と価値法則の問題は資本主義のみ係わることではなく、社会主義社会における基本的経済法則の探究という課題に接近するためのものであり、社会経済構成体の発展と、それを貫いて存在している経済制度としての商品生産を認め、社会主義における「規制的たりえない」商品生産及びその経済的法則としての価値法則を利用することによって過渡的段階における社会主義の建設という実践的課題をはたそうとするものであった。

すなわち、冒頭の商品論と言われるものは、それが資本制的経済学のみならず、いわば広義の経済学的課題としても把握されるものであること。そして両側面の統一のうちに、マルクスの提起した商品論の実践的意義を過渡期の経済学の基礎範疇として改めて設定しうるものであること。以上のような問題意識が本書を貫いているかどうかは著者が商品生産というものを理論的にどう扱っているか

にかかっている。しかるにコズロフは、スターリンの提起した問題と社会主義社会における価値法則の利用というソ同盟において永きにわたって行われている論争のうえに立って、社会主義社会における商品生産を確認し、原始共同体以来、奴隸制、封建制、資本制各社会に存在する商品生産と社会主義における商品生産とを歴史的にまったく意味を異にするものとして考え、その意味の相異を商品生産の史的展開それ自体のうちから把握しようとする。本書が社会主義における商品生産理論のための序論として書かれたものであることが本書を歴史的な著述たらしめているが、その本来の意図はより実践的であることを先ずもって念頭におかなくてはならない。

(注) ちなみに、コズロフはソ同盟における価値法則論争のなかでは、社会主義経済においては生産手段も商品形態をもっていることを強調し、社会的生産の諸部門のあいだに広範な交換が存在している社会では、この交換過程である生産物が商品としてあらわれ、それと交換される他の生産物が商品でないというような状態はありえないとしている。(木原正雄編『価値と価格の理論』一九五八年、二四九頁参照。)

二

本書の構成は次のとおりである。

I、商品関係の発生。

書評

- II、奴隸制社会における商品生産。
- III、奴隸制に基づく生産様式の時代における価値法則の作用。
- IV、古代ギリシャにおける商品経済理論の発生。
- V、ブルジョア科学に反映した古代商品生産。
- VI、なぜ奴隸制社会の商品生産は資本制的生産になりえないのか？
- VII、歴史的展望。

この構成を一見してもあきらかなごとく、著者が目的としているところは、経済史的に奴隸制に基づく生産様式の商品生産の側面の解明のみに終るのではなく、サブ・タイトルが示すごとく商品生産理論への足場として、古代社会において商品生産が経済思想の上にもどるに反映しているか、また、かかる思想がブルジョア社会における経済思想にどのように反映しているかといった点にまで及んでおり、最後に商品生産への歴史的な展望を与えることによって、世界史的発展を貫く商品経済の意義を探究しようとしている。

五〇〇〇年から七〇〇〇年の過去にさかのぼる商品生産の発生は、今日に至るまで商品経済を歴史の場面から除けなくしている。したがって、階級社会の全体的な歴史的発展にとって商品関係の本質と経済的発展の種々の段階でのその特殊なメルクマールを基礎付けることが重要なことになる。かかる商品経済の法則を認識することが、現代の帝国主義との闘争、共産主義社会の建設の遂行にとって最も意義のあることである。これが科学的に遂行されるために

は、まず商品生産の発生及びその歴史の必然性を明らかにしなければならぬ。

商品生産と社会的分業、また、所有関係と社会的分業Ⅱ商品生産という点については、すでにマルクス・エンゲルスの古典的見解があり、それはまた現代においても、商品生産を理解する基本的視角を提供している。そこでわれわれが商品生産の発生（商品関係Ⅱ交換の発生）を問題にする場合には、かかる視点を十二分にふまえた上で展開する必要がある、それを欠いて商品生産にかんする科学的説明を与えることは出来ない。多くのブルジョア理論（古典学派以来の経済学説）においてかかる視点はまったく排除されてしまっており、そこからはブルジョア理論の本質たる弁護論的現象把握がわれわれの目につく。そして商品経済は人類史の永遠的事象として把握され、その特殊・歴史性がまったく看過されてしまう。その原因は、ブルジョア理論における社会形態の誤った把握からなるものであり、より立入って考察するならば、窮極において、相互に独立した生産者の実在をもって人間の歴史をはじめることになり、一部のブルジョア理論家によって先駆的に把握された人間の歴史の初期段階にかんする歴史科学上の成果さえみおとされてしまうことになる。すなわち、総じてブルジョア理論がマルクス・エンゲルスの科学的商品生産理論のメルクマールに対して措定するところのものは、生産者としての人間の孤立的な活動、生産手段の私有を前提したうえでの歴史であるにすぎない。

人的所有は私的所有とはまったくことなつた所有形態であるとしており、この点を混同しているブルジョア理論が、商品生産の永遠の存在を主張したのはしごく当然であつたとしている。ただ実際には、しかし、共同体内部の人間間の経済的關係が、共同体の全成員の労働が直接的に共同体の総労働の一部として現われるというように考えられるのである。かかる点を明確にすることが出来るならば、ブルジョアの理論家が考えるような原始共同体の時代の交換を、発展した商業として、また、商人資本が大規模に関与しているところの商業としてとらえるというような誤謬に陥ることをふせぎ、交換の発生を科学的に説明しうるのである。ここから古典学派とくにアダム・スミスによって唱えられ、その後俗流的経済学説にまで影響が及んでいるところの交換Ⅱ人間性（本能）把握の非科学性を暴き、それに代つて、歴史科学的方法の適用による人間社会での社会的分業の発展—交換の恒常化を説明しうるであらう。

交換の恒常化は、労働生産物が商品に転化されてゆくプロセスであり、使用価値の性質から価値の性質の増大を意味し、労働に社会的性格を与え、価値はその社会的労働の結晶となる。

商品関係のかかる分析は、同時にわれわれをしていかに価値法則が作用しはじめるかということを明らかにしめる。価値法則にしたがつて諸商品はその社会的価値に照応して交換され、他方では価値は社会的必要労働支出によって規定されている。（三七頁）
かくして交換を媒介として成りたつところの商品関係は貨幣関係

むしろ商品関係において私的所有（*Privateigentum*）が重要な契機となつてゐることはみのがすことができないけれども、それは商品関係Ⅱ交換が前提されてのことであり、商品関係それ自体の歴史の説明とはなしえない。マルクス・エンゲルスの初期の著作『ドイツ・イデオロギー』において、所有形態の発展を通して、社会諸形態を明らかにしてゆこうとする場合、そこでは同時に自然発生的分業と所有形態の発展とが不可分のものとして取り扱われ、まず最初の所有形態として種族的所有を措定している。この点のちに彼らが豊富な資料をもとに原始共同体論を展開し、商品生産の歴史にまったく新しい見地を導入する基軸となつてゐる。そもそも生産の発生ということが、生産過程における人と人との関係を形成し、所有を発生せしめるのであるが、共同体的所有というものは、自然と人間の集団的労働との対立の成果としてあらわれるのであり、生産手段も労働生産物もすべからず共同体の所有に帰してゐた。したがって共同体的所有という条件のなかで、生産用具の幼稚な段階においては全労働がもっぱら必要労働であり、剰余生産物の生じてくる余地はなかった。まさに商品関係はかかる所有形態の分解過程において生じてくるものである。

以上のような観点からコズロフは原始共同体における所有形態を分析し、とくに共同体的所有と、個人的所有（*personliches Eigentum*）著者によると、共同体成員の職能に応じた集団的労働をスミアズに行うための所有形態）とはあい矛盾するものではなく、個々を發展させ、それを裏打ちする社会的分業の發展、生産力の進展はなお一層剰余生産物を増産し、それにかんする所有関係が階級分化を發展させ、私的所有に基づく主人と奴隸という関係を發展させる素地をつくることになる。

共同体を破壊していく要因はじつにかかる商品関係をもたらすとき、高度の生産力の發展と社会的分業の進展であり、一方では商品Ⅱ貨幣関係を發展させるが、他方では奴隸制社会の基本的な社会関係に商品生産は従属的意義しかもちえない。すなわち自然経済的要因と商品経済的要因とがこの場合にいかに絡みあうかが問題になる。奴隸制社会は商品関係が主人Ⅱ奴隸という基本的な社会関係をもとおいかくすほどに進展し、商品市場は奴隸市場にまで拡大し、そこにおいては、われわれが資本制社会にみるような労働力商品の売買に形式的に類似した関係をも認めえ、そのうえ奴隸社会をも破壊してゆくものとしても商品Ⅱ貨幣関係の役割を認めざるをえないのではあるが、そのあとに続く社会経済構成体は、基本的には自然経済の新たな再編成であるところの封建制社会であり、商品生産をその最も完全な姿態において展開するところの資本制生産を導くことは決してなかつた。かかる点において、発生期商品生産の限界、いな、歴史の發展を貫いて認めうる商品生産が、その時代の基本的社会関係に従属し、そこでの生産力を高め、生産諸関係を崩しなから、次の社会経済構成体を準備するという特異な意義というものを認識しなければならないのであり、ブルジョア理論が概して陥り

がちな商品生産の永久視という考え方が歴史科学的理解にほど遠いものであることが確認される。そのことは古代ギリシャにおける商品生産の経済思想(プラトン・クセノフォン・アリストテレス)(九八一―一二三頁)において、商品関係というものがその中心的思想をなしているながら、「商品関係の発展」(「価値関係の発展」)の眞の過程を導出しえなかつたということを併せて考えるなら一層明らかになつてくる。すなわち、奴隷制社会の基本関係がもつ商品生産の発展へのマイナスの面を当時の経済思想といえどもぬぐいきれなかつたのであり、そこに資本制の商品関係の存在を論定することは当時の経済思想をまったく理解しないものともいえよう。

三

コズロフは最後に奴隷制社会にまでいたる商品生産の発生過程の中ですでに出てきた問題、すなわち商品生産の過程と自然経済的過程との連関の問題を、歴史的な発展過程の総体のうちに位置づけようとする。ここでは、商品生産とそれともなう価値法則が、奴隷制―封建制―資本制―社会主義の社会発展史のなかで演ずる役割が総括される。封建制社会において、搾取の形態転換をひき起す要因として商品関係が考えられるのであるが、それも組織的な商品関係―価値法則の貫徹をみるのではなく、封建社会の本質的な再編成された自然経済の優位がそれをおしとどめ、まさに単純商品生産の限度内に価値法則の作用をおし込めてしまい、「封建社会の典型的姿

態」(二四三頁)として単純商品生産を確立する。しかし私的所有に基づく社会においては、価値法則の作用は単純商品生産者を貧者と富者とに分解する必然的傾向を有しており、封建社会の基本関係にさらたげられながらも、その過程は進行し、資本制の商品生産の展開を準備していく。

資本制社会においては、むしろ商品生産は全面的に開花し、労働力までが商品となることによって価値法則は「より広範に作用し」(二四四頁)剰余価値の取得に至ってその頂点に達する。

しかるに社会主義の勝利は商品関係の諸局面を「収縮させ」、「商品生産は特殊な種類の商品生産となる。」(二四五頁)そこでは価値法則の作用は計画的利用にとつて代られ、価値法則のもつ二者闘争的矛盾を排し、その破壊的結果がとり去られる。

「商品生産はしたがって唯一の生産様式のみ結び付いているものではない。けだし、それは種々異なった社会経済構成体において存在したし現に存在しているからである。商品生産の意義とその特殊性とはそれらを孤立的に考察するのではなく、当該の生産様式の典型的性格をなすところの全ての他の経済的諸条件との関連において考察する場合にのみ理解しうるのである。」(二四六頁)

さて、われわれはコズロフの以上のような展開からいかなる意義を汲みとつたらよいであろうか。商品生産にかんする問題はすでに述べたごとく、理論と歴史との両部面において多様な提起がなされており、わが国においては勿論のこと、ソ同盟、中国、東独などに

おいて活発な議論が展開されている。そのような状況の中で、本書の提起した問題は、それが商品生産の発生期にかんする論述だといえ、従来多くみられたいわゆる商品経済史観の単純さを排して、社会諸形態の発展過程において商品生産が演ずる役割を社会諸形態の基本的関係を中心に置いてみることにより、「単純商品生産」から資本制的生産への移行の複雑性を明示し、「単純商品生産」概念の論理的・歴史的限界を示唆した。また、社会主義社会における商品生産のまったくことなる規定を資本主義からの移行過程での商品生産の矛盾の展開の止揚として統一として措定することによって、商品生産理論へのアプローチに新たな視角を導入したことであろう。とくにそれが社会主義建設という実践的課題にこたえるという点において、社会主義における商品生産の側面を経済制度として認め、それに固有の法則たる価値法則を利用していこうというスターリンの問題提起にたいして、本書が歴史的的分析を通じての論証をなそうとしている点であろう。総じてそれは社会主義社会の過渡期

の経済学において商品生産をいかに取り扱つたらよいかという理論問題であり、商品生産、就中、その細胞たる商品分析のもつ実践的意義を再び過渡期の問題として確認しようという方向を打出すことができるのではなからうか。本書がその歴史分析や学説批判において劃期的というほどのものをもっていないにしろ、著者の問題意識が社会主義社会の経済的諸問題にとつて最も基本的なものであるだけに、一読に値するといえよう。

* 本書のオリジナル・タイトルは

Г. А. Козлов: Первые шаги в развитии товарного производства (введение в теорию товарного производства)

〔付記〕 本稿執筆中に G. A. Koslow: Die Warenproduktion und das Wertgesetz im Sozialismus (1961) を入手したがこれについては更めて紹介したい。

—一九六一・七・二八—